

終わらない「ゼミ」

藤川すみれ

1年間のゼミがおわってしまった。まだ続いているようで、完結したという気がしない。3年次から2年間、このゼミで学んだこと・知ったことは、授業時間だけのものではなかった。大学の内でも外でも、教授やゼミ生とすごした時間はとても濃密だった。以前ならぼんやり浮かんで消えてゆけただった「感覚」を、具体的なものとして、言葉や映像を通して再発見できた。それはこのうえなく嬉しくて、高揚することのできる時間だった。

4年ゼミではあらたに未知の世界と出会った。3年ゼミで教授を通じてランポーに触れたときは、まるで魔術使いにさまざまな魔法を見せてもらう感じだったが、4年ゼミになると、私たちが手探りで見つけたものを、迷子にならないように導いて手にとらせてもらった、という印象がある。

途中から授業に組みこまれた参加者による映画の感想「ひとことコメント集」も、みんながそれぞれ違うことを違う文章で書いていて、とてもよかった。思いがけない視点や、哲学的な見方、いいな！と思う文章を見つけたあとで、それをもとにさまざまなことを考えた。話言葉よりも文字のほうが直接的に表現できるのかもしれない、とも思った。

映画では『惑星ソラリス』の反響が大きかった。不思議にも見方が2つの視点にわかれた。人間の複製が人間でありうるかという観点と、水の生命についての観点。ふつうのSF映画の設定と異なり、惑星ソラリスでは水が自由に形を変える生命体、生きるオブジェとして存在する。私の感想はこちらのほうに寄っていた。うねうねと渦巻く水、細かい雨の水、花瓶のなかの水は、いまもなまめかしい姿で脳裏にのこっている。

『時の支配者』では平坦なタッチのアニメーションなのにもかかわらず、4次元空間で年齢の異なる2人の「自分」が同時に存在する、という宇宙的現象に立ちあつた。『野生の惑星』は異様であるがゆえに魅力的だった。ラルーのアニメーションには瞑想、地球外生命体、思考の怪物——私の想像のおよばない世界があつて、衝撃が走った。

ユイスマンスの小説『さかしま』にあらわれたデカダンスも驚くべきものだった。以前には、主人公デ・ゼッサントと訳者の澁澤龍彦——どちらの想像世界にも、底なし沼のような吸引力を感じていたが、ゼミではなにか違うものがつかめた。

周囲のすべてを完璧に好みに合わせてしまうデ・ゼッサントの実行力と、桁はずれの想像力には目を見はつた。部屋には水族館、機関車、亀、怪奇植物などが配される。「機械仕掛の精巧な魚たち」や「英国遊船の案内地図」で、「東

洋航海の感覚をほとんど瞬間的に、すばやくわがものとすることができた」ということ。カレル・ゼマンの映画『悪魔の発明』をも彷彿とさせ、コレクションの世界に強い興味をもった。

現実のオブジェからどこまでも想像力をひろげてゆく行為に、エネルギーさえ感じた。たえまない想像・創造、内なる世界から外なる世界へのひろがりやすさまじい。理想の世界を創造しながら、神経症と体調不良で破滅する。ここでは壊れることが魅力的であり、理想を求める欲望に強さを感じる。

コレクションについての講義では、海外ゼミ合宿で見たプラハの国立博物館を思った。動物の剥製や鉱石がずらりとならび、博物館であんなに興奮したことははじめてだった。「驚異陳列室」として世界の縮小模型をつくるコレクションに魅かれた。

石、鉱物についての講義のあとで、桑原弘明のきらきらと輝く結晶の入ったスコープ作品を見た。自然物の生む不思議な形、鮮やかな色ときらめき……それに関連して心にのこったのが、稲垣足穂『結晶物語』からの引用だった。

「なんにしても人間よりは樹木の方が偉い。樹木よりも鉱物、それも水晶のようなものがいっそう偉いのだ。人間も早く鉱物になってしまったらよかろう。いや、いっそのこと遠い星になって、いついつまでもひとりぽっちで輝いていたら素敵だなあ……。」

なんとすばらしい発想だろう。石は長い時を生きながら、自然物の織りなす生と死をながめる。自身もゆっくり生長して結晶に変化する。鉱物になりたいという言葉に、ひとつの永遠への思いを読んだ。

卒業論文の準備過程ではマル秘リストがくばられ、使うべきではない日本語の表現を学んだ。私たちが意識しないままに、どれほどまちがった日本語を書いたり話したりしているか、ということに気づき、それからはワープロの変換にも自覚的になった。

年末の合宿では、夜ふけまで全員の卒論指導をしていただいた。森のなかの先生のお宅ではすばらしい即興の料理、スープやパスタやサラダを供され、料理もまた文章やアートにつながっていることを感じた。

もう卒業してしまうけれど、これからも教授の講演会などに行きたい。ゼミはいろいろなところにつながっているので、おわるものではない。美術館へ足を運び、映画を見、本を読む。世界のこともっと知りたい、この先も旅をしたい、と思いつづけるだろう。

海外ゼミ合宿のあと、プラハやパリの空気は私をとりかこみ、しばらくのあいだのこっていた。不思議な魔法にかかったみたいだった。そういう感覚をいつももっていたい。これからもゼミのテーマと空気と方向を、かならず追いつづけるだろうと予感している。